様式Ｃ-19

# 科学研究費補助金研究成果報告書

平成 23 年６月８日現在

機関番号：32612
研究種目：若手研究（Ｂ）
研究期間：2008～2010
課題番号：20720091
研究課題名（和文）　１８世紀フランスにおける描写詩の発展とルソー

研究課題名（英文）　The evolution of the descriptive poesy and Rousseau in the 18th Century France

研究代表者
井上　櫻子（INOUE SAKURAKO）
慶應義塾大学・文学部・助教
研究者番号：10422908

研究成果の概要（和文）：本研究は、ジャン＝ジャック・ルソーの人間論と 18 世紀フランスにおける描写詩の発展との関連について探るものである。研究代表者は、フランス文学史において今まであまり光を当てられることのなかった描写詩というジャンルに属する作品に注目し、思想的議論と詩的創造との関連を探った。このようにして、ロマン主義の詩的精神が、さまざまな思想家や作家の間の協力関係、および対立関係から形成されることを明らかにした。

研究成果の概要（英文）：This research examines relations between Rousseau's anthropology and the evolution of the descriptive poesy in the 18th century France. We focused our attention to works belonging to the descriptive poesy, genre rather neglected in the history of French literature until today, and investigated relations between philosophical debates and poetic creation. In this way, we revealed that the poetic spirit of romanticism is formed through cooperation as well as conflict between different philosophers and authors.

交付決定額

（金額単位：円）

| | 直接経費 | 間接経費 | 合　計 |
|---|---|---|---|
| 2008 年度 | 1,000,000 | 300,000 | 1,300,000 |
| 2009 年度 | 700,000 | 210,000 | 910,000 |
| 2010 年度 | 600,000 | 180,000 | 780,000 |
| 年度 | | | |
| 年度 | | | |
| 総　計 | 2,300,000 | 690,000 | 2,990,000 |

研究分野：人文学
科研費の分科・細目：文学　ヨーロッパ文学（英文学を除く）
キーワード：仏文学　美学　哲学

## １．研究開始当初の背景

本研究は、研究代表者がパリ＝ソルボンヌ大学（パリ第４大学）にて執筆し、2005 年２月に審査を受けた博士論文『ジャン＝ジャック・ルソーにおける夢想の哲学的意味(*La Valeur philosophiques de la rêverie chez Jean-Jacques Rousseau*)』（同大学博士号（Ph. D）取得）の内容を発展させることを目的としたものである。この論文は、ルソーにおける夢想の概念に注目しながら、1760−70 年代の描写詩の発展がルソーと百科全書派の哲学者、とりわけディドロとの間に展開された道徳性と快楽に関する思想的論争と密接な関係にあると示すことにより、「18 世紀は哲学の世紀であり、詩的精神は死滅した」という従来のフランス 18 世紀についての考え方に疑義を差し挟もうとするものである。

描写詩については、日本国内では文献の入

手が困難であることからほとんど研究が進んでいないことは言うまでもない。しかしさらには、フランス本国においても、エドゥアール・ギトンの『ジャック・ドリールと 1750−1820 年のフランスにおける自然の詩』や、年刊誌『ルーシェ、アンドレ・シェニエ研究』に収められた論文以外に、まとまった研究がいまだ存在しないのが現状である。確かに、啓蒙の世紀における美学の変遷の過程を探ろうとする試みは、ジャック・シュイエ『啓蒙の美学』や、アニー・ベック『近代フランス美学の生成―古典的理性から創造的想像力へ　1680−1814―』などの研究書において既におこなわれている。特に、後者は 18 世紀における美学的知識を網羅した大著であるが、カヴァーする範囲があまりにも広いために、やや概説的な性格が強いと言える。特に、この著作の第３巻は、「詩的理性へ」と題されているにもかかわらず、詩人についてはわずかにアンドレ・シェニエに言及があるのみである。したがって、本研究代表者が博士論文で試みたように、18 世紀後半に時代を絞り、啓蒙思想家の提示する美学論、人間論との関連から描写詩を分析しようとするものはほとんど存在しない。そのような事情から、本研究代表者は、博士論文執筆時と同じ方向性で研究を継続することとした。

## ２．研究の目的

(1) 描写詩というフランス文学史研究上等閑視されて来たジャンルの作品群に目を向け、それらをルソーやディドロといった思想家の著作と関連づけることにより、今まで光を当てられることのなかった 18 世紀の韻文の重要性を浮き彫りにする。

(2) 描写詩という今まであまり研究がなされなかった分野との関連性から、18 世紀の代表的思想家の作品を読み直し、新たな解釈の可能性を提示する。

(3) 啓蒙思想家の提示する感受性論、美学論が描写詩の発展に与えた影響を探りながら、フランス文学史とフランス美学史の二つの研究分野を関連付け、前ロマン主義時代における新たな美意識の誕生と創造行為との関連を明らかにする。前ロマン主義時代における美学と文学の関連に焦点を当てた研究書はあまり存在しないが、あらゆるジャンルに同時代的に顕在化したロマン主義という美意識の誕生と創造行為との関連については、文学史と美学史という二つの研究分野を関連づける考察が必要だからである。

(4) フランスの文学界、思想界に考察の対象を絞るのではなく、崇高論の大陸への受容と描写詩という問題に注目しながら、イギリス文学、思想とフランス文学、思想との比較検討をおこない、さらにはドイツのロマン主義美学についても調査を進める。このような方法により、ロマン主義時代における文化の超域化現象と同時に、さまざまな国の文化、精神性の独自性を示すことを目指す。

## ３．研究の方法

(1) 18 世紀後半におけるフランス詩学の発展に関する研究調査に必要な資料は、日本ではほとんど入手不可能である。そのため、2008 年度から 2010 年度の各年度につき、２、３週間ほどフランスに滞在し、フランス国立図書館、フランス学士院図書館で研究調査をおこなった。特に力を入れたのが、18 世紀後半に活躍した詩人たちが、ルソーや百科全書派の思想家たちの美学論、および人間論をどのように受容したかという問題に取り組むための資料を収集することである。

(2) 国内でおこなわれている 18 世紀フランス文学に関連する研究会に参加し、研究代表者が単独で研究を遂行する上で、おもに首都圏の 18 世紀研究者からの助言を受けた。

　まず、平成 20 年度は、桑瀬章二郎氏（立教大学准教授）とともに、首都圏の若手 18 世紀研究者（おもにフランスや日本で博士論文を完成、あるいは間もなく完成予定のルソー研究者）を集め、『新エロイーズ』の読解を目的とした研究会を主宰した。この研究会を通して、ルソー研究に応用可能な最新の方法論について検討することができた。

　また、平成 20 年度から慶應義塾大学にて開催されている『百科全書』研究会（主宰は中部大学教授　鷲見洋一氏）にも参加し、ディドロをはじめとする百科全書派に関する研究動向についての情報を得た。

(3) 研究代表者は、本研究課題以外に、科学研究費補助金の助成を受けた研究課題の遂行に携わることにより、技術面での貴重な助言を受けた。

　まず、平成 20 年度は基盤研究(A)「フランス文学における総合的生成研究–理論と実践」（研究代表者：京都大学大学院文学研究科教授　田口紀子氏）に連携協力者として参加した。国際的に高い評価を受けた生成研究の専門家との意見交換を通して、18 世紀以前の作品に関する生成研究の方法について考察することができた。

　加えて、平成 20 年度から基盤研究（B）「フランス『百科全書』研究」（研究代表者：中部大学教授　鷲見洋一氏）に研究分担者として参加した。これは『百科全書』のデジタル化を目的としたものである。この研究プロジ

ェクト参加メンバーからは、『百科全書』という膨大な資料体の扱いについて有益な助言を受けた。

(4) 国内の研究者のみならず、フランス本国の研究者からも研究支援を受けた。
　ルソー研究の現状については、特にフランス国立科学研究センター・ルソー研究班班長のタンギー・ラミノ氏との意見交換を通して、『新エロイーズ』にみられる自然描写と描写詩との関連について考察を深めた。また、ラミノ氏主宰のルソー研究班セミナーでの研究発表、およびその後の討議は、ルソーの自伝にみられる自然描写と西欧の田園詩の系譜との関連について検討を進める貴重な契機となった。
　また、アンシャン・レジーム期の韻文研究については、おもにシルヴァン・ムナン氏（パリ第４大学名誉教授）、およびアラン・ジェヌティオ氏（ナンシー第２大学教授）と緊密に連絡を取り、本国での研究の現状について常に確認するよう努めた。その結果、ジェヌティオ氏編集の論文集『詩の礼賛』にサン＝ランベールの『四季』にみられるバークの影響に関する研究成果の一端を示す機会を得た。

４．研究成果

(1) まず、感受性と快楽をめぐる百科全書派とルソーの思想的論争について、主たる問題系を整理し、さらに、そのような論争が『新エロイーズ』における夢想の概念にどのように反映されているかを検討した。その成果は、「５．主な発表論文等」［雑誌論文］②にまとめられている。査読有のフランスの学術雑誌に掲載が許可されていることから、研究代表者の考察は、妥当性のあるものとして認められていると考えられる。

(2) 次に、感受性と快楽をめぐって百科全書派とルソーが展開した論争の中にサン＝ランベールやルーシェなど描写詩を手がけた詩人の感受性と快楽に関する考え方を位置づけることを試みた。
　「１．研究開始当初の背景」に挙げた博士論文では、おもにルソーが描写詩を手がけた詩人たちに与えた影響について検討したが、本研究課題遂行中には、むしろ、同時代の自身たちが世に問うた自然の歌が、自然のタブローを紡ぎだそうとするルソーに与えた影響について検討を進めた。その結果、従来、フランス文学に自然描写の美学を導入したのはルソーであると考えられて来たものの、実際には、自然の礼賛という主題はルソー独自のものとは言えないことが明らかになった。ルソーはむしろ、同時代の詩人たちの間で田園生活の礼賛という主題が流行していたことを意識し、この主題を彼独自の人間論にかなうような形に変奏してみせたと考えられるのである。研究代表者は、『新エロイーズ』における自然描写と描写詩との関係に注目しながら、この事実を論証しようと試みた。その成果は、「５．主な発表論文等」に挙げた［学会発表］①、②、③で報告するとともに、［雑誌論文］③、⑤にまとめられている。特に、フランス国立科学研究センター・ルソー研究班セミナーで発表した際、現地の 18 世紀研究者から高い評価を得た。したがって、今後もこの方向性で考察を深めてゆきたい。

（3）ロマン主義時代における文化の超域化現象、およびそれぞれの国の文化の独自性について検討すべく、崇高論の大陸への受容という問題に注目しながら描写詩の読解を進めた。特に、サン＝ランベールの『四季』にみられるバークの崇高論の影響について考察した結果をフランスで出版された論文集『詩の礼賛』に発表した（「５．主な発表論文等」［図書］⑤）。

（4）18 世紀の詩人たちの模索と、初期ロマン主義の詩人たちの詩学改革との関連づけをおこない、広い意味でのフランス文学史における描写詩の重要性を確認した。その際、研究代表者は、ただ韻文というジャンルにおける描写詩の位置づけを試みるのではなく、啓蒙思想家の提示する美学論や人間論が描写詩の発展に与えた影響に注目し、前ロマン主義時代における新たな美意識の誕生（啓蒙思想家の示す理論）と創造行為（詩的創造）との関連を明らかにしようと試みた。本研究課題遂行中には、特にジャック・ドリールの晩年の著作『想像力』における感受性論に注目し、考察の結果を紀要論文にまとめた（「５．主な発表論文等」［雑誌論文］①）。このような観点から、ドリールの晩年の著作を分析した研究は、フランスでもほとんど存在しないため、今後はフランスの研究論集に研究成果を発表することを目指したい。

（5）以上のような研究成果をより一般の読者に向けた雑誌、図書において広く公開することを試みた。たとえば、描写詩というジャンルについて分かりやすく解説した論文を、慶應義塾大学通信教育部在籍者向けの雑誌『三色旗』に寄稿した（「５．主な発表論文等」［雑誌］④）。
　また、本項目(1)に示した研究成果をより一般向けに書き直したものを、学部生向け入門書『ルソーを学ぶ人のために』所収の『新エロイーズ』の解説に組み込んだ（「５．主な発表論文等」［図書］②）。

さらに、本項目(2)において紹介した研究成果を発展させ、ルソーの自伝における自然描写と描写詩との関係について検討した論考を、やはり生成研究についての入門書『文学作品が生まれるとき　生成のフランス文学』に発表した（「５．主な発表論文等」[図書]④)。同書においては、ルソーと描写詩に関する個別研究のみならず、「系列的アプローチ」というフランス本国で用いられ始められている新たなテクスト解釈の手法についても紹介した。

最後に、国内のみならず、国外の読者にも研究成果を発信するため、サン＝ランベールの『四季』生成過程にディドロの人間論、美学論が与えた影響に関する論考をフランス本国で出版された論文集に寄稿した（「５．主な発表論文等」[図書] ①)。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計 5 件）

① 井上櫻子、「啓蒙期の感受性論からロマン主義の叙情詩へ―ジャック・ドリール『想像力』（1806）を中心に―」、『慶應義塾大学日吉紀要　フランス語フランス文学』、査読無、第 49、50 号、2009 年、p.9−28。

② 井上櫻子，「『新エロイーズ』における夢想の道徳的機能」（フランス語論文、原題は« La fonction morale de la rêverie dans *La Nouvelle Héloïse* »），『ジャン＝ジャック・ルソー研究』（フランス語のタイトルは *Études Jean-Jacques Rousseau*），査読有, 第 17 号, 2009 年, pp. 283−307。

③ 井上櫻子、「『新エロイーズ』における欲望と規律（２）―ルソーにおける「自然」の両義性の問題を中心に―」、『慶應義塾大学日吉紀要　フランス語フランス文学』、査読無、第 48 号、2009 年、pp. 1−19。

④ 井上櫻子、「啓蒙の時代に「詩」を制作すること―描写詩の発展を中心に」、『三色旗』、査読無、第 728 号、2009 年、pp. 8−12。

⑤ 井上櫻子、「『新エロイーズ』における欲望と規律（１）―「エリゼの庭」にみられる田園詩的主題とその変奏―」、『慶應義塾大学日吉紀要　フランス語フランス文学』、査読無、第 47 号、2008 年、pp. 1−18。

〔学会発表〕（計 3 件）

① 井上櫻子、「ルソーと描写詩：『新エロイーズ』における欲望と自然」（フランス語による発表。発表原タイトルは« Rousseau et la poésie descriptive : le désir et la nature dans *La Nouvelle Héloïse* »），フランス国立科学研究センター・ルソー研究班セミナー, 2009 年 3 月 28 日、フランス・モンモランシー市・ルソー研究図書館。

② 井上櫻子、「『新エロイーズ』における田園詩的主題とその変奏―サン＝プルーの欲望とその抑圧の問題を中心に―」、科学研究費補助金・基盤研究(A)「フランス文学における総合的生成研究–理論と実践」研究会、2008 年７月 12 日、京都大学。

③ 井上櫻子、「『新エロイーズ』における自然、欲望、夢想」、18 世紀フランス研究会第７回例会、2008 年５月 24 日、青山学院大学。

〔図書〕（計 5 件）

① 井上櫻子、オノレ・シャンピオン（Honoré Champion）社、『文学作品はいかにして生まれるのか　草稿、文化的コンテクスト、テーマの発展』（フランス語による論文集、原題は *Comment naît une œuvre littéraire ? Brouillons, contextes culturels, évolutions thématiques*）、2011 年、 pp. 55−69。

② 井上櫻子、世界思想社、『ルソーを学ぶ人のために』、2010 年、pp. 94−116。

③ 井上櫻子、慶應義塾大学出版会、『フランス文学をひらく　テーマ・技法・制度』、2010 年、pp. 193−206、pp. 235−250。

④ 井上櫻子、京都大学学術出版会、『文学作品が生まれるとき　生成のフランス文学』、2010 年、pp. 83−101、pp. 103−105。

⑤ 井上櫻子，ナンシー大学出版局（Presses universitaires de Nancy），『詩の礼賛』（フランス語による論文集、原題は *L'Éloge lyrique*）、2008 年、pp. 259−271。

〔産業財産権〕
○出願状況（計 0 件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：

番号：
出願年月日：
国内外の別：

○取得状況（計 0 件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕
ホームページ等
特になし。

６．研究組織
(1)研究代表者
井上　櫻子（INOUE SAKURAKO）
慶應義塾大学・文学部・助教
研究者番号：10422908

(2)研究分担者
なし。
（　　）

研究者番号：

(3)連携研究者
なし。
（　　）

研究者番号：